

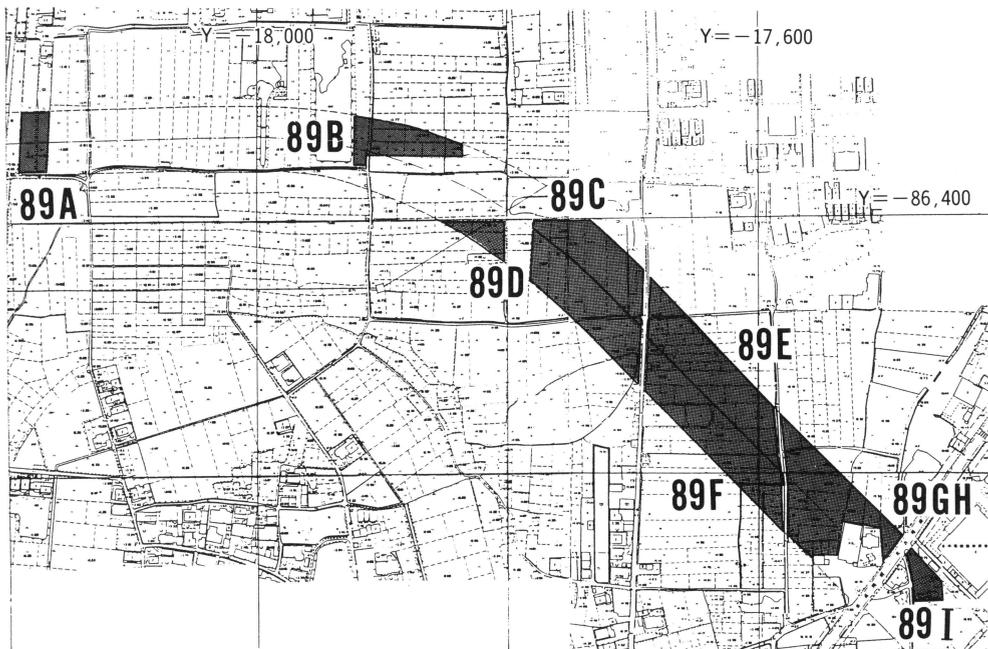
まつ かわ ど  
松 河 戸 遺 跡

調査に至る経過

松河戸遺跡は春日井市の南東方、庄内川と地蔵川に挟まれた標高約15mの沖積地に立地する。松河戸町一帯は、方格地割の畦畔（水田）が近年まで遺存する県内でも有数の地域であり、その畦畔の形状から「条理制遺構」との関連が注目され、特に「醍醐寺文書の安食荘」の記載との関係を結びつけるという文献史学・歴史地理学によって研究されてきた。

そういう地域に名古屋環状2号線建設に伴う発掘調査を昭和62年8月より実施してきた。昭和62年度の調査では、上層に15世紀代を上限とする水田跡を4面（水田跡Ⅰ～Ⅳ）検出し、下層では、微高地上に縄文時代前期～後期・古墳時代前期～後期の遺構や遺物を検出した。昭和63年度では、上層は同じく水田跡を検出し、下層の微高地上で縄文時代早期～前期・後期と古墳時代の遺構・遺物を検出した。

今年度は9調査区を設定し、その中に昭和61年度試掘調査（TT10・11）地点が入る。その時に、中世の遺構面や遺物包含層を確認し、柱穴・溝の検出などから中世の居住域を推定したところであり、中世の村落の一端が判明できた。また、上層の水田跡の範囲や下層の微高地で弥生時代の遺構・遺物も検出された。（神谷友和）



第1図 調査区位置図（1/6000）

## 調査の概要

3年間で総長2km・面積約6万㎡・を発掘調査し、検出した遺構・遺物の内容から5期に区分できる。Ⅰ期は縄文時代早期～後期、Ⅱ期は縄文時代晩期～弥生時代前期、Ⅲ期は古墳時代、Ⅳ期は鎌倉時代、Ⅴ期は室町時代後期～江戸時代である。

Ⅰ期～Ⅳ期は下層で検出した遺構で、微高地上に立地する。Ⅰ期は、前期の竪穴住居(63L区)や中期の集石遺構(62F区)を帯状に延びる微高地の2ヶ所で検出し、他の5ヶ所の微高地でも土器が出土していて、そのような場所を選んで生活していたのだろう。石器には決状耳飾・縦型の石ヒが出土している。

Ⅱ期は、89D・E区(第3図)で溝と土坑を検出した。SD120(自然流路)は下層で縄文土器・上層で弥生土器が出土し、縄文時代晩期末から弥生時代にかけての遺構であることが解った。前期の土坑3基があり、稲作農耕のために一度は定住を試みたのだろう。出土遺物には、遠賀川系土器と条痕文系土器が共伴し、その割合は6対4で遠賀川系土器が優位を占める。SD120に注ぐSD05は狐状に回りその内側に居住域が想定できる。さらに、SD05は環濠の可能性が考えられる。主な出土遺物には、独鈷石・打製石斧や丸木弓、SD120下層より植物遺体(クルミ・クリ・ヒョウタンなど)が多数出土した。

Ⅲ期は、62AB・63DE・89A区で検出し、62A区SK201出土の一括資料は古式土師器編年の標式(松河戸式土器)となっている。いくつかの微高地で溝などを検出し、木製品などが出土している。

Ⅳ期は、89D・E・F・GH・I区の2ヶ所の微高地で多数の溝とピットを検出した。溝は微高地に沿って設けられているものと方位を意識しているものと2者があり、ピットが集中している地域があり、掘立柱建物群や杭列をもつ屋敷地が想定でき、多数の溝は、屋敷地を区画するためのものや水路と関連するものであろう。遺構によっては、一括資料として充分な量の陶器を出土し、本遺跡の消費地の状況から近接する生産地との流通を推測することも可能である。主な遺物に墨書陶器があげられる。

Ⅴ期は、上層で検出した方格地割の水田遺構であり、全調査区に広がり地形に合わせて東西・南北方向の長地型地割に設定されている。水田面は場所によって4面(水田Ⅰ～Ⅳ)あり、上限は15世紀代と考えられ、Ⅳ期の水田遺構は確認できなかった。地籍図と発掘調査の結果からみて近年までほぼ同じ位置に畦畔が設けられたと判断できる。

おそらく、Ⅰ期の縄文時代より微高地に人が生活していて、室町時代までは地形に左右されて営んでいたであろう。それが、室町時代後半頃より水田開発が頻繁になり、それまでの微高地が削平・開墾されたといえそうである。広範囲の調査で「条里」の施行時期が判明できたことは大きな収穫であったといえる。

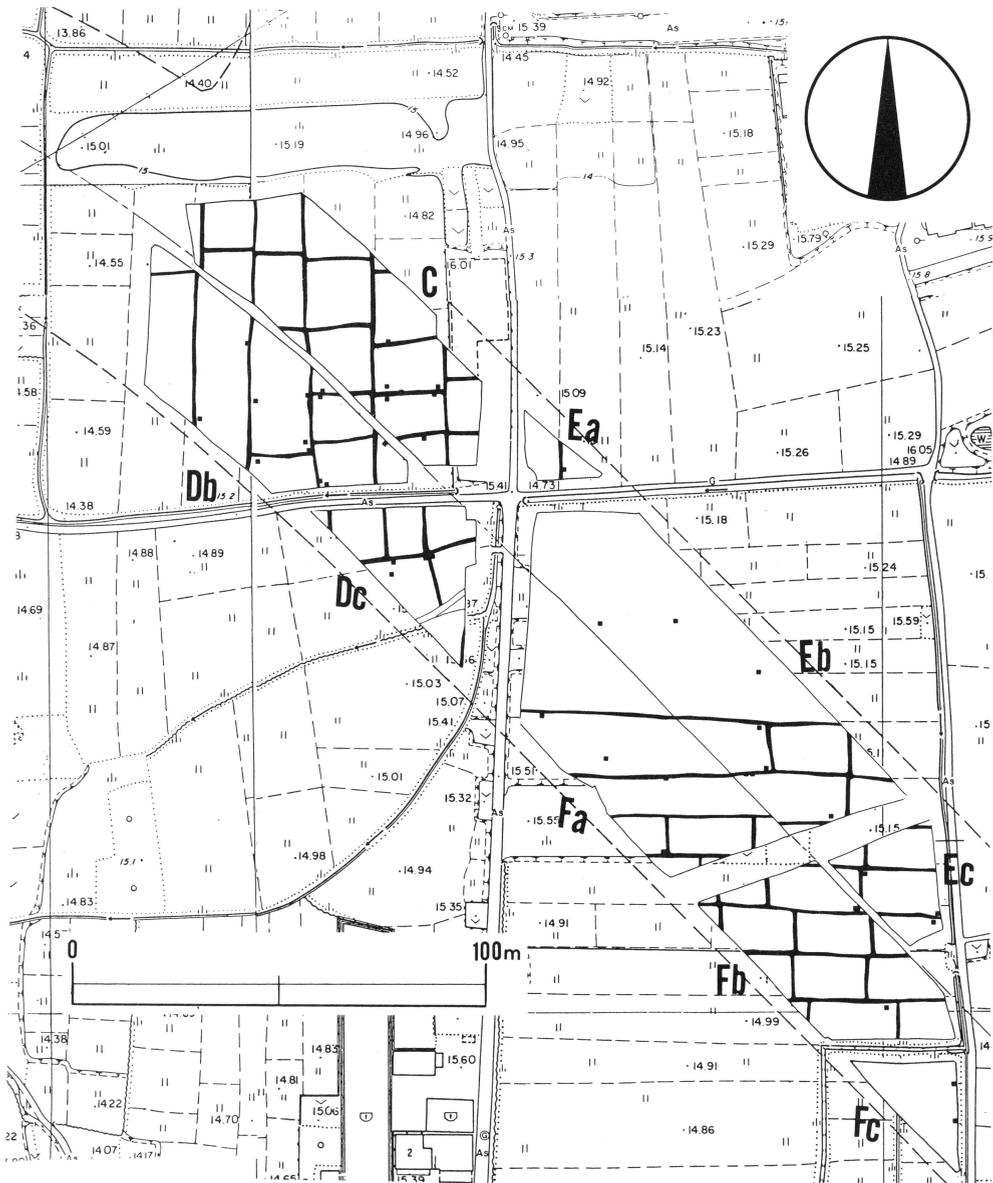
(神谷友和)

V期（条里制遺構）

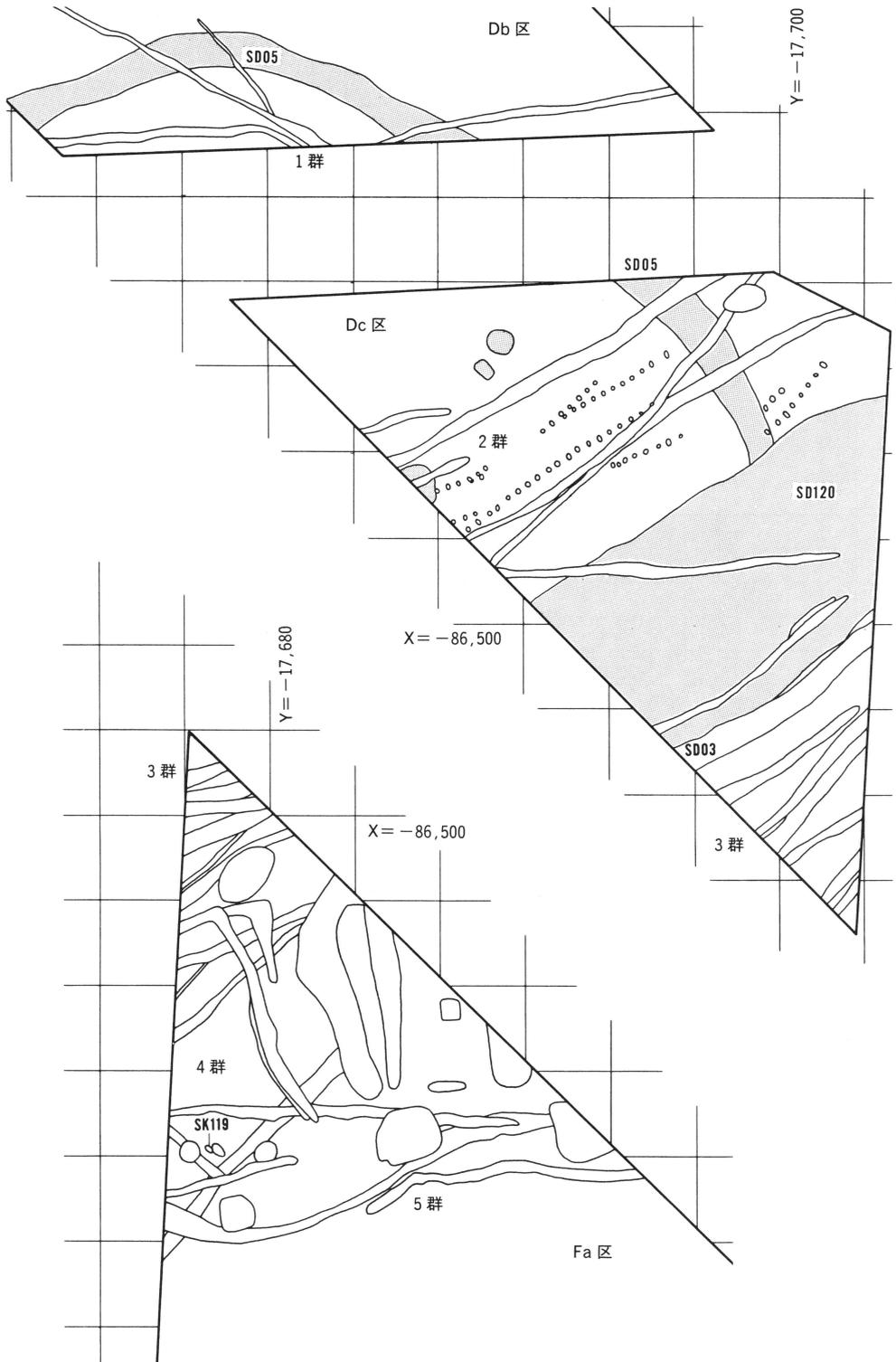
A～Hの各調査において、条里制地割に基づくと考えられる水田を検出した。

C・Db・Ea区では南北方向の長地型地割、Eb・Ec・Fa・Fb区では東西方向の長地型地割の水田を検出した。多いところでは現水田下に4面の水田面が確認され、その最下層は15世紀後半にさかのぼりうるものと考えられる。

なお、Fa・Eb区北半では、基盤が高いため、畦畔を確認できなかったが、土坑の存在等により、現水田より古い水田があったものと考えられる。 (後藤浩一)



第2図 水田遺構配置図 (■…土坑)



第3図 D・F区主要遺構配置図 (アミ部分はII期の遺構)

II 期

C～F区の基本層序は、中・近世の水田耕土以下に中世の遺物を包含する灰色粘土層が堆積し、その下の黄灰色シルト層が基盤となる。調査区北・南側では灰色粘土層が厚く堆積し、黄灰色シルト層は確認できなかった。下面の遺構は、この東西方向に帯状に細長く伸びる黄灰色シルト層を基盤とする微高地に立地している。

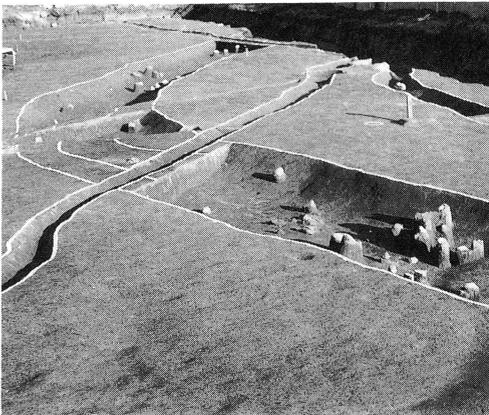
縄文晩期後半・弥生前期の遺構をD区において検出した。SD120は浅谷状の地形をなし、下層の木本質泥炭層では縄文晩期後半の土器とともに、丸木弓、木製品、打製石斧が出土し、上層では弥生前期後半の土器とともに石剣が出土した。SD120のセクションより、下層は人工の可能性も考えられるが、上層は自然河道であったと思われる。

弥生前期の遺構は自然河道（SD120上層）とつながり円弧状にめぐる溝（SD05）と土坑3基を検出した。遺構は後世の耕作等により削平を受けており、その全容は不明であるが、土坑の位置より自然河道（SD120上層）と溝（SD05）に囲まれた地区に集落が営まれていたと考えられる。発掘区外に南西方向に伸びるSD05を考慮すると直径約55mの半円状の溝をめぐらす集落が想定できる。

出土遺物は遠賀川系の壺・甕、条痕文系の壺・深鉢があり、遠賀川系土器を主体とし、条痕文系土器が共伴していた。時期は西志賀期に比定される。なお、調査区北側の灰色粘土層より独鈷石も出土しており、尾張地方では珍しい例である。

松河戸遺跡ではこれまでの調査でも礫層の微高地より、縄文早期末から後期にかけての遺構が確認されている。本年度調査した微高地はそれらと異なり、遺跡の立地の面でも注目される。これらの資料は庄内川中流域における縄文時代から弥生時代への展換期を解明するうえで貴重な資料となるであろう。

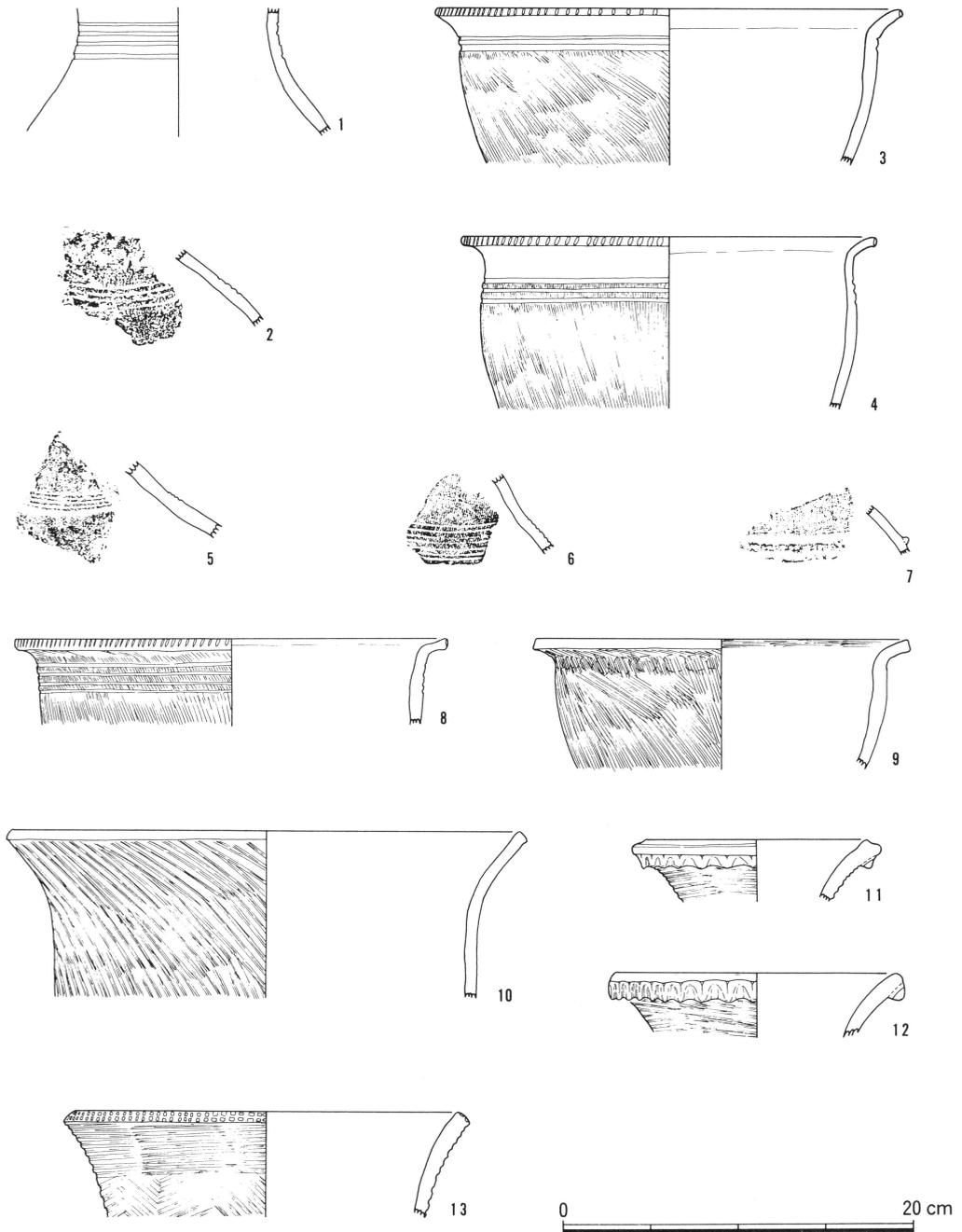
(後藤浩一)



SD05遺物出土状況



丸木弓出土状況



SK 102 : 1 ~ 4、SD 05 : 5 ~ 12、SK 101 : 13

第4図 弥生土器

## IV期 (D区)

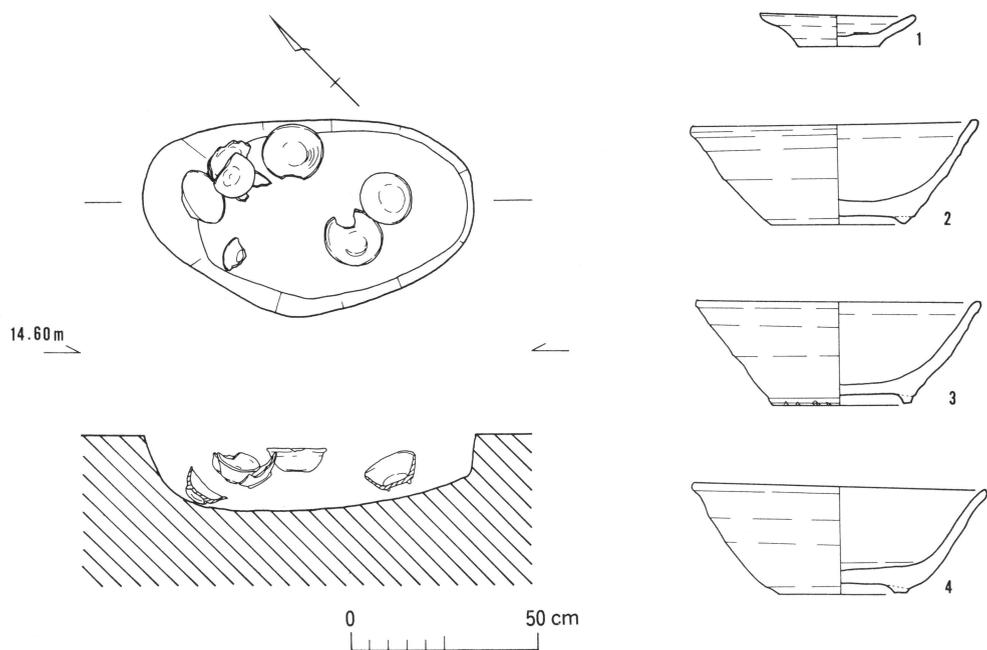
IV期の遺構は、II期の遺構と同一面で検出した。その立地はII期と同じ微高地上であるが、II期の遺構が89Dc区以西にその中心を持つのに対し、IV期は帯状微高地全面に存在する。

この時期の主な遺構は溝であり、ほぼ全域に広がるが、その形状から5地区に分類できる(第3図)。その他の遺構として土坑・ピット等が見られるが、それぞれ地区が限定されている。そこで、他の遺構との組合せも含め、各々の性格について考えてみたい。

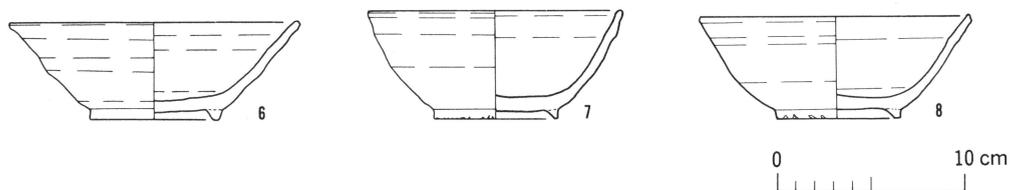
最も北に位置するのが、幅0.3m・深さ0.1mの「U」字掘溝群(1群)である。これらは微高地より北の低地帯にあり、1点から3方に向かって放射状に広がる。地形が広範にわたって平坦であることから、水田に関係する溝であろうか。溝以外の遺構は見られない。その南は、幅0.8m・深さ0.1mの「U」字掘溝群(2群)であり、微高地北部に位置する。この地区には、ピット列が9列検出されており、その中には平行関係を持つものも見られるため、この地区は通路に関係するものと考えられる。その次に、幅0.7m・深さ0.2mの箱掘溝群(3群)がある。微高地中央部にあたる。溝の密度が濃く、切り合いも激しい。水路の地区と思われる。2群と3群の境界には、幅2.0m・深さ0.7mの溝(SD03)がある。これはIV期の溝の中で最大規模のもので、その埋土に厚く砂層を持つ。この位置には、V期以降現在まで水田用水路が存在していることから、IV期から長く受け継がれた基本水路であろう。次に、幅0.7m・深さ0.3mの「V」字掘溝群(4群)が微高地南部にある。これらの溝は直角に曲がるものを中心とし、その他の遺構としてピット群が検出されている。ピットが柱穴、溝が屋敷地を区画する意味を持つと考えられ、4群地区は居住域と想定できる。最も南には、幅0.7m・深さ0.1mの浅い溝群(5群)があり、微高地南端部に位置する。該当する溝はわずか2条のみである。これより南に遺構はまったく見られない。そして、この無遺構地帯が低湿地帯であり平坦面であることから、1群と同じく水田の可能性がある。

出土遺物としては、灰釉系陶器がその大半をしめる。俗に「山茶碗」と呼ばれるもので、表面がザラつき厚手の碗(碗A)と表面の滑らかな薄手の碗(碗B)が各遺構において共存する。例えば、SK119では8個体出土している(第5図)が、碗Aと碗Bが4個体づつとなっている(第6図 1~4碗A、5~8碗B)ように、両者の優劣は付けにくい。

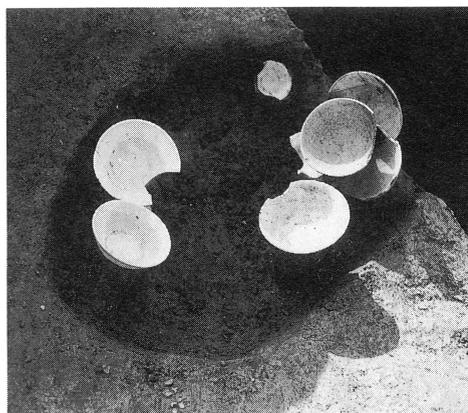
灰釉系陶器は瀬戸古窯跡群・美濃古窯跡群等、生産地における研究が先行しているが、消費地から研究を進めるうえでこれらの資料は貴重である。(岡本直久)



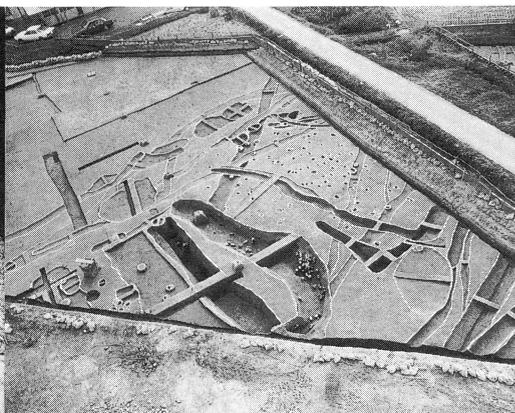
第15図 SK119遺物出土状況



第6図 SK119出土遺物



SK119遺物出土状況



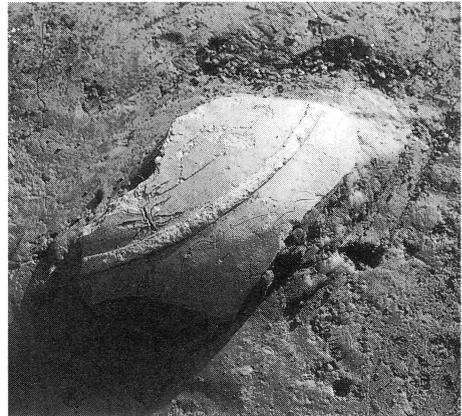
Fa区全景

Ⅳ期（G・H・I）

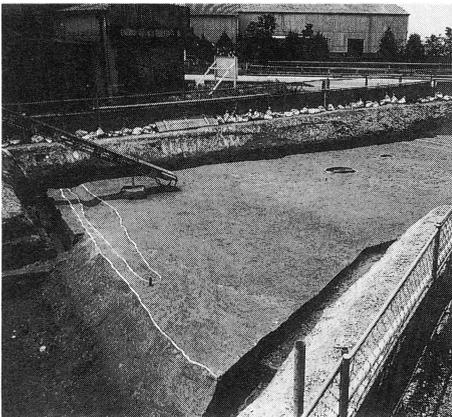
上面G・H区でⅤ期の条里型水田を10筆検出した（ST01～10）。ST01～07は東西方向の、ST08～10は南北方向の長地型地割である。地形的に西が低く東に向かって高くなっているため、水田面は、現水田下に、ST10・05とST06・07西半部で2面、ST06・07東半部とST02・03・04・08・09・10では一面で、ST10以東とI区には水田面はなかった。さらに、ST01以南は地形的に低く、近年まで苗田となっていたとのことで、やはり近世の水田は存在しなかった。

下面Ⅳ期（12～13世紀頃）の屋敷地と考えられる遺構を検出した。G・H区での遺構のひろがりやSD01・105・106・107を南限とし、西はSD112・115・116・123を境に低地に接する。溝はいずれもほぼ正方位に配置されており、数箇所重複が認められる。ピットは調査区全域にわたってみられるが、SA01～03を除くと建物としてはまとまらない。しかし、SD104以南には径10cm程度の柱根が遺存するピットもあることから、溝に区画されて数棟の掘立柱建物群が存在したと思われる。I区では当該期の溝を3条検出した。とくにSD01は、地籍図から、南に道が位置する側溝と推定される。なおI区ではさらに下に9世紀の溝3条と土坑を確認した。SD05からは風字硯や馬歯が出土した。

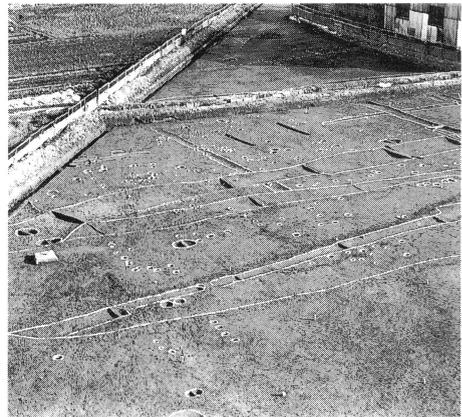
（松原隆治・樋上 昇）



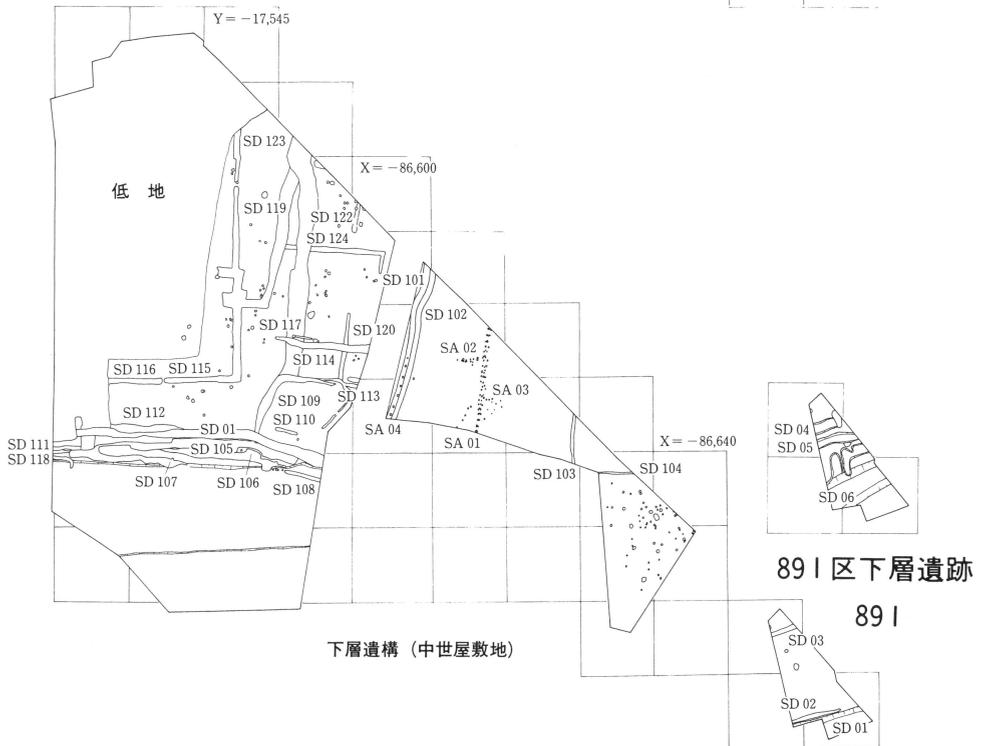
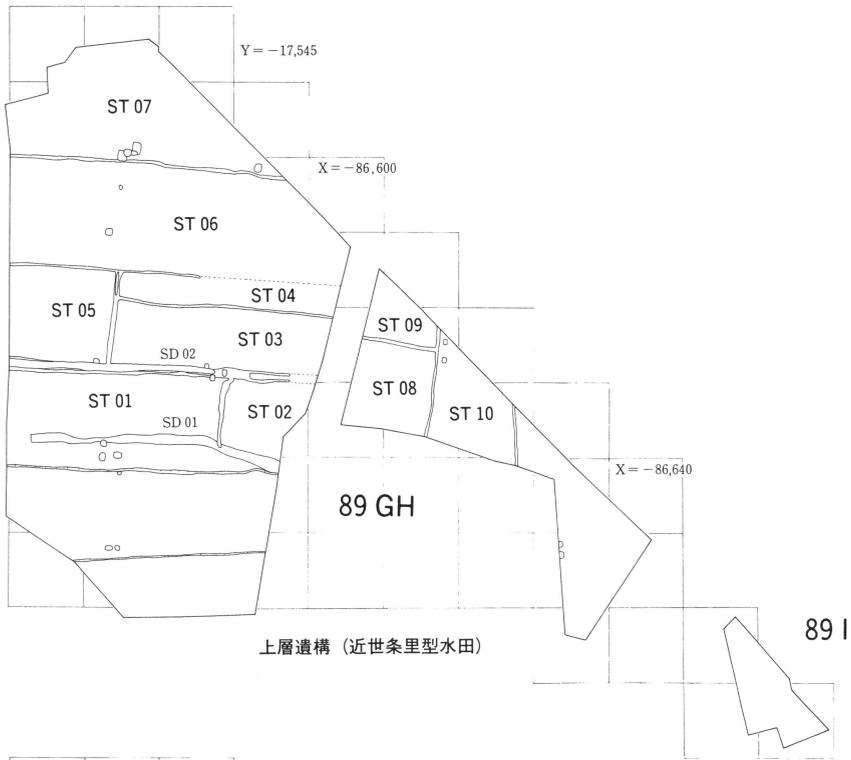
G・H区SD01遺物出土状況



I区全景（南東から）



G・H区全景（西から）



第7図 G・H・I区遺構配置図 (1/1000)